宗教的情操および道徳性の形成における非文字メディアの活用

― イエズス会のキリスト教布教戦略 ―

木　村　政　伸

はじめに

1549年のフランシスコ・ザビエルの来日から始まる日本におけるキリスト教布教の歴史は，他方では日欧の本格的文化接触の歴史でもある。つまり，軍事的経済的利益の追求を主たる目的とする南蛮貿易（主にポルトガル貿易）と比べ，宗教の導入・普及は，日本人の世界観・宇宙観，死生観，価値観など，文化の基層に存する体系に分け入っていくことになるからである。

こうした視点から，初期段階のキリスト教布教をほぼ独占していたイエズス会の活動についてこれまで様々な分野の文化に関して多くの研究がなされてきた。教育についても，戦前にシリング著『日本に於ける耶蘇会の学校制度』（初版1943年）が出されるなど，多くの研究が積み上げられてきた。

これまでの研究の中ではイエズス会の教育戦略の特徴として学校制度と出版活動が指摘されてきており，その具体的な展開を16世紀日本においても確認することは容易である。シリングをはじめとする研究もその一環に位置付けられよう。このイエズス会の教育戦略の特徴は，また一面では，文字メディアを活用した戦略としても位置付けられる。この文字メディアとの関係では，日本の識字問題への関心の延長から，すでに「キリシタンの信仰を支えた文字文化と口頭伝承[1]」としてまとめた。本論は，文字以外のメディアによるイエズス会のキリスト教布教戦略を考察し，キリスト教を背景とした宗教的情操や道徳の形成においてどのように非文字メディアが活用されたか，またそのことによって日本の教育，ひいては文化にどのような影響があったかを検証するための仮説を提示しようとするものである。

以上の問題意識から，宗教の教義・教理を知的論理的に理解する方法に対して，「宗教的情操」については宗教的価値を伴った感情・感性・心性という意味で用いることにする。感情である以上，使用するメディアの違いを反映して，身体性がそこでは大きな注目点になるであろう。

非文字メディアの活用による宗教的情操や道徳，ひいてはキリスト教信仰への結び付けについては，既に多くの先行研究があるが，それについてはそれぞれの分野ごとに検討することにする。

なお，基本的史料として，『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（第一期から第三期まで）を用い，適宜他の史料で補足することとする[2]。

第１章　イエズス会の非教育的キリスト教布教戦略

イエズス会によるキリスト教布教の戦略については，多様な側面からの考察が必要であるが，その全体像をつかむ上でも重要と思われる非教育的戦略を確認しておこう。

イエズス会による布教を推し進めるために用いられた手法で重要なものに，貿易がもたらす経済的利益による支配層の取り込みがあげられる。西国に多くのキリシタン大名が輩出したり，また領域内の布教を容認，あるいは援助した大名たちの多くはこうした南蛮貿易からもたらされる経済的利益によるものであったこと

2015.6.29　受理

は，良く知られていることである。また当初はそうした経済的利益によるキリスト教布教の容認であっても，宣教師たちとの日常的な接触を通して，熱心な信者となった大名も多い。

一方で，これもよく知られたことであるが，イエズス会の戦略として「上からの布教」，すなわち支配層を改宗させることによって領民を一気に信者とする戦略をとっていた。

南蛮貿易による経済的利益と並んで特徴的なことは，病気治療による支配層・民衆の取り込みである。例えば，豊後では以下のようなことがあった。

> これら豊後のキリシタンは概して貧者であり，彼らが司祭らの慈愛と，彼らおよび聖なる洗礼を介して健康を得るのを見て，（彼らの）親戚や子供，友人が皆キリシタンになっている。豊後とその近郊だけで千名以上が洗礼を受けており，日曜日には常に多数の人がミサ，および，日本語をはなはだよく知るジョアン・フェルナンデスとドゥアルテ・ダ・シルヴァ両修道士の行う説教に臨んでいる。‥山口のキリシタンは（右の人々よりも）いっそう身分高く，よりよく理解している人々である[3]。（1558. 1. 10）

> 目下，帰依している者は，貧しい病人や貧窮者，悪魔に苦しむ者，およびそのほかの病にかかっている者であるが，デウスを賛美することには，彼らがことごとく快方に向かい，貧窮のもと，ほかに薬がないために，彼らが聖水と祝別されたパンを薬としていることである[4]。（1555.9.23）

宗教への入信において，「病」の治癒が契機となることは，キリスト教にとどまらず広く見られる現象である。イエズス会の報告集では，こうした病気治癒が入信のきっかけとなった事例が数多くあげられており，16，17世紀の日本の民衆の心性を知る手がかりとなる。また，「病」治癒の具体的方法において，多くの聖遺物などが用いられるが，そのことはまた別に論じることにする。

非教育的戦略として，見逃せないのが，軍事的援助である。例えばキリシタン大名として名高い大友宗麟は，ニセヤの司教に以下のように大砲の提供を求めた。

> 貴下，および（イエズス）会の司祭らの仲介により（インド）副王が大砲一門を（予に）贈ったことを聞いたからである。‥予が再び大砲を求めるのは，予が海岸にあって敵と対峙しており，防衛のために大砲を大いに必要としているからである[5]。（1568.9.13　）

鉄砲伝来以来，西洋社会からもたらされた武器が日本国内で圧倒的な威力を発揮したことは，戦国時代の大名にとって広く知られており，ポルトガル船がもたらす武器は垂涎の的であった。それらの武器をもたらすのであれば，日本にとっての「異教」も受け入れようとする大名の多かったのである。

第２章　イエズス会の教育的キリスト教布教戦略

ここでは，宗教の本来の布教形態である教育的活動を考察する。この種の布教活動には，以下のような形態が存在した。

ア，文字メディアによる布教
イ，説教による布教
ウ，聖遺物・奇跡による布教
エ，暗誦・音楽の活用
オ，演劇及び儀式・儀礼の活用

これらの諸形態のうち，文字メディアによる布教については，コレジヨ，セミナリヨ等の学校の設立，キリシタン版と呼ばれる教科書・書籍の刊行などが具体的にあげられる。この形態については，前出の論考ですでに詳しく述べたところであるので本稿では基本的に扱わない。また説教による布教，すなわち口頭伝承によるキリスト教教理の教育は，その基本的な史料が不足しており，今後の課題としておきたい[6]。

したがって，以下，聖遺物・奇跡による布教，暗誦・音楽の活用，演劇及び儀礼・儀式の活用など，非文字メディアの使用による布教活動を検証の対象にする。

なお，検証対象は，おおむねザビエル来日の1549年から，秀吉の伴天連追放令が出された1587年までとした。伴天連追放令以前においても，イエズス会は各地領主から圧迫や弾圧を受けたことはあったが，それでも長崎，島原，天草，豊後など許容されたところも多く，積極的な布教活動の場に事欠かなかった。しかし

伴天連追放令以後は，外国人宣教師の表向きの布教活動や学校教育は相当の圧迫を受けてくる。布教を取り巻く情勢の変化という点で一応の時代区分として1587年を考えてみたい。

第１節　聖遺物・奇跡による布教

1581年報に「豊後においては，聖遺物，および聖水の力をもって多数の病人と悪魔に憑かれた者を癒し給うた。このことは多数の人が改宗し，また(キリシタンにおいては)信仰を堅くする上で良い機会となった。[7]」という報告がある。これは，布教が教理を知的に認識するのではなく，身体的に受容することの一つの表現である。

ここで挙げられている宣教師がもたらす「聖なるモノ」が，さまざまな現世利益をもたらすとして，珍重され，信仰形成につながった[8]。また，日本人はそうした「モノ」への欲求が強いことが指摘できる。

当地のキリシタンらが皆，祝別されたコンタツに寄せる信心はいとも篤く，我が兄弟たちが我らのもとに送付してくれた若干のコンタツと，幾つかの共同の場所にあるコンタツに祈りを捧げることを決して止めない。もし，幸いにして誰かがこれを得たならば，絶えず手から手へと渡す。キリシタンになしうる最大の恩恵は祝別されたコンタツを与えることである。尊師よ，我らの主への愛により，我らにコンタツを送付されたい。というのも，（コンタツが）かくも珍重される所で用いられるのは，はなはだよいことと思われるからである[9]。(1561.10.8)

こうしたコンタツを求める民衆の心性を踏まえて，宣教師も次のような方策を講じている。

祝別されたコンタツやヴェロニカを彼らに分け与えることを涙ながらに切々と請うた。我らはインドから携えて来た若干の品を分け与えた。

彼らがコンタツや，これにより造る宝物をどれほど珍重するかは筆舌に尽くし難い。然して彼らがこの大いなる信心を保つように，彼らにそれを与えるに先立って，彼らはまず一カ月，または二，三カ月の間，涙を流して祈りを捧げることを根気よく続けている[10]。(1564.10.3)

すなわち，コンタツを求める民衆に対して，一定の信心の証を求めたのである。

こうした「聖なるモノ」は，コンタツに限らない。

＜長崎の事例＞土曜日には教会や修道院，敷地が人で埋まり，私は水を祝福してその他の務めを行なった。これが終わると，水は跡形もなく持ち去られた。というのも，彼らは（聖）水を非常に信仰しているからであり，我らの主（なるデウス）は病にしろその他の場合にしろ，聖水を介して行なう多くの奇跡によって彼らの信仰に応え給うている[11]。(1571.2.4)

長崎では，聖水が信者によってすべて持ち去られているが，これも聖水がもたらすと信じられている現世利益を求めてのことであろう。

さらには，次のような天草・志岐の例もある。

この聖なる老人が諸人の間でいかに敬われていたかを尊師らが知るため（申し上げれば），然して我らが埋葬し終えると，彼の手巾やシャツ（camisa），ズボン下（ceroulas），その他同類の物は，彼の良き教えを記念するための遺物として残らず持ち去られ，断片にして分配されたが，我らはこれを遮ることができなかった[12]。(1571.2.4)

すなわち，1571年に志岐で死去したコスメ・デ・トルレス師の衣服や小物にいたる持ち物が，聖遺物として信者に持ち去られたのである。同じような事例は，禁教後に殉教者が登場する時期まで数多く見かけられる[13]。

こうした日本人の心性についてアルメイダ修道士は，「当地（五島‥木村）の異教徒は生きている間に来世のため多くの遺物や免罪（符）を買う習慣があり，救いのために全財産をそれに費やす人も数多くいる。[14]」(1566.10.20) と述べているが，日本人の中に現世利益を求めて「聖なるモノ」に依存する心性が存在していることを指摘している。この心性が形を変えて，コンタツや聖水に形を変えたのであろう。また，こうした心性に対して，コンタツなどを配布することによって信仰を獲得しようとしたイエズス会の戦略も垣間見える。

この種の動きについて，宮崎賢太郎は，「キリシタンに改宗したあとも，彼らは神仏像のかわりにキリシタンの聖像，数珠の代わりとしてロザリオ，経文の代わりとしてオラショや聖書，守り札の代わりに十字架

やメダイを求めた[15]」と見ている。ここには，キリスト教信仰が，日本の伝統的な仏教・神道的信仰と大差ない現世利益・呪術的信仰として民衆に受け入れられていたことが明らかである。

民衆にとって理解が困難な世界観・宇宙観を前提とした教義によるのではなく，目の前にある困難や苦悩を取り除いてくれる「聖なる物」によって民衆の宗教的依存心をつかむ戦略が見えてくるのである。

第２節　暗誦，音楽によるキリスト教信仰の身体化

ア，祈禱文の暗誦

イエズス会の布教戦略の身体性に着目した時，まず注目されるのは暗誦及び音楽の活用である。こうした聴覚を利用した教育の場合には，聞き取りによる教義内容の知的理解という側面と，音楽的環境による感情的身体化という側面を考えなければならないだろう。特に後者は，音楽的環境がもたらす感情の高まりである感動や昂奮が，宗教的情操の形成に大きな影響を与えることは，キリスト教の教会建築やアジアの石窟寺院の音響効果などを考えればたやすく理解されよう。

聴覚を利用した宗教的情操形成という視点から，まず祈禱文の暗誦を取り上げたい。祈禱文の暗誦ということは，さまざまな宗教において行われており，宗教的情操を形成する上で有効な方法として確立している。日本の伝統宗教の中でも，声明や祝詞をはじめとして，一定のリズムで文言を朗誦することは行われていた。こうした暗誦という方法については，これまでのイエズス会に関する専攻研究では後述する音楽や演劇などに比べてほとんど触れられてこなかった。ここではイエズス会による暗誦について詳しく検討してみよう。

1561年10月8日付，ジョアン・フェンルナンデス修道士が豊後より，イエズス会の修道士に宛てた書簡には，「ギュルメ修道士は絶えず日本語の習得をなすほか，子供たちにキリストの教えを説いている。子供らは非常に鋭敏である。というのも，十分に話せない者でも，八カ月もすれば教えをことごとく彼らの言語とラテン語で言えない者は一人としてなく，彼らの大半はミゼレレ・メイ・デウスを唱えることができるからである。[16]」と，日本人の子どもの学習状況を報告している。

ここでフェルナンデス修道士は，子どもに教える順序について以下のように述べている。

> 彼らに（教える際に）取る順序は以下のようである。ミサを聴いた後，毎日交代で一人が唱えて他の者が応誦するが，キリストの教えの内主要なもの，すなわちパーテル・ノステル，アヴェ・マリア，クレード，サルヴェ・レジーナをラテン語で，またデウスの十誡と教会の掟，大罪とこれに対する徳，ならびに慈悲の所作を彼らの言語で唱えるに止める。正午には，全員が教会に参集し，一度に教えをすべて唱えることができないので，忘れぬよう毎日三分の一を唱え，また，よきキリシタンとなるため，毎日一箇条ずつ説明する。教え（ドチリナ）が終わって，司祭に他の用がない時には，二人ずつ司祭のもとに行ってその手に接吻し，各人に少量の焼いた米，もしくは他の類似のものを与え，これにより彼らが喜んで来るようにするためである。というのも，日本人は子供が自ら好んでなすこと以外に強制しないからである。その後，慈善院の前にある立派な十字架の前まで歌いながら列をなして行き，アヴェ・クルスを一度歌って十字架を賛美し，次いで各自の家に帰る。これを続ける者が四，五十名いるであろう[17]。

この報告によれば，「パーテル・ノステル」以下の４種の祈禱文をラテン語で唱え，その後「十誡」などを日本語で唱えている。もちろん，民衆がラテン語を理解できるわけもないから，解説が別にあったとしても，聖なる文言が繰り返し音声メディアを通じて信者の心に浸透していった事であろう。

同じ時期に豊後にいたアルメイダ修道士も以下のような報告をしている。

> 我が教会に隣接する一つの地所に十一，乃至十二組の夫婦が居住し，その子女や従僕らが一緒にいる。アヴェ・マリアの時刻になると同時に，皆，十字架の前に跪いて教えを（唱え）始めるのであり，これは一時間強に及ぶ。彼らは非常に忍耐強いので今日まで一日も怠ったことはなく，司祭が彼らに命じたわけではないのに，父母たちが彼らをこのような習慣に従わせているのである。母親らはいとも信心深いので，子が言葉を発することができるようになると早速，授乳する時にドチリナを教える。当修道院には，デウスに仕えるため両親や，そのほかの者が捧げた少年が数名いる。彼らは今後，当地において多大な成果をもたらす人たちであり，食事の時には常に彼らの内の誰か一人が学び暗記したことを話す。彼らは信心篤く，とりわけ年の頃十三歳の最年長者はそうであり，しばしばあることだが，日本語で受難の信心深い一節を読むと，諸人の面前で顔を少しも動かすことなく，たちまち涙を流し始める[18]。

（1561.10.1）

ここには，祈禱が１時間にも及ぶことが記されており，その真偽は別としても熱心な信仰が長時間の祈禱に結び付いていることがわかる。また，乳幼児の段階から祈禱文の暗誦を教えられており，祈禱文の身体化を実証する事例を提供している。

同じことは，島原・有馬でも見られた。

子供たちもまたドチリナを教えられており，祈禱を知らぬ子供は一人としてなく，彼らの大半はドチリナをすべて覚えていた。また，（司祭は）彼らの一人を異教徒とし，もう一人をキリシタンとして互いにデウスの教えや異教徒について討論させた[19]。（1564.10.14）

彼らは日曜日や祝日のみならず，他の日にもミサと説教に与るため信心をもって訪れ，彼らの子供たちも毎日二度，教会に来た。正午にはドチリナ（を学ぶ）ため，また，アヴェ・マリアの時刻には毎日唱えられる連禱により祈るため（訪れる）ほか，朝には同じく子供たちはミサを聴くため非常な寒さに堪えつつ早起きする。ミサにおいて彼らは恭しく良い調子で応唱して私を助け，このほかにも彼らの多くは一日のほとんどすべての時間を修道院で話をすることに費やし，また，同所で我らの同僚パウロから，彼ら（日本）の文字と漢字を学んでいる[20]。（1566.9.13）

これらの暗誦がラテン語で行われていたのか，それとも日本語で行われていたのかは不明であるが，信者の多くが子どもに祈禱を暗誦させていたことを知ることができる。

また，平戸地方（平戸島，生月島，度島）でも，同様である。

＜度島の事例＞いとも親愛なる者たちよ，もし尊師らがこの島々の子供たちのドチリナを聞くならば，昨日（まで）悪魔に仕えていた子供たちの大なる信心と整然とした様を見て，涙を流さずにはおれないからである。すなわち，教え（を聴く）ためにおおよそ百名の男児と女児が参集し，教会に入るとすぐさま聖水を取り，跪いて祈りを捧げる姿はまさに修道者であり，各自は直ちにそれぞれの席に着く。‥彼らはキリシタンのドチリナをすべて覚えるだけでは満足せず，これを解説して唱える。‥ドチリナを学び終えた時，彼らは説教者である[21]。（1561.10.1）

＜平戸の事例＞ジャコメ・ゴンサルヴェス修道士はすでに言語をかなり習得し，日本で作られた書物を翻訳している。これは書物により少年らへの説教と指導を練習するためである。洗礼を希望する人が絶えず，彼と私はその人たちの教育に当り，私は日曜日と祝日毎にキリシタンに説教し，不完全ながら司祭らに言葉を教える。正午過ぎの一時，子供たちがドチリナ（を学ぶ）ために来る。彼らはそれや使徒信教，パーテル・ノステル，アヴェ・マリア，サルヴェ・レジイナをラテン語で，また，その他のものを彼らの言葉で暗誦している[22]。（1565.9.23）

この平戸の事例では，パーテル・ノステル以下の祈禱をラテン語で行っている。この事例から，他の地域でも1560年代半ばまでの祈禱文の暗誦はラテン語のままで行われていたと推測される。子どもたちは，意味がわかることもなくありがたいおまじないのようなものとして唱えていた可能性が高い。

これまでは「パーテル・ノステル」以下の祈禱文を暗誦するまでになった子どもたちが数多く報告されているが，そのための手法として以下のように先述した日本人の「コンタツ好き」を利用したものもあった。

＜生月の事例＞我らが滞在した六日間で彼ら（子供たち‥木村）は祈禱をすべて習得したが，これほど早かったのは，彼らが司祭にコンタツを求めて来た際，司祭が祈禱を習得している者にしか与えないと言ったからであり，彼らはコンタツをもらう前に祈禱を唱えた。（中略）

別の集落で我らはさほど苦労しなかった。なぜなら，人々が純朴であり，住民も，彼らの教師たる仏僧も私が説くことにたやすく同意したからである。同所においても子供たちはごく短時間で祈禱を習得し，司祭が平戸に戻るため彼らに別れを告げる時には，我らが乗船する浜辺まで祈禱文を唱えつつ同行したほどである[23]。（1565.9.23）

ここでは，コンタツを欲しがる民衆の心性に訴えて，祈禱文の暗誦をコンタツ授与の条件とすることによって，祈禱文暗記の動機づけとしたことが報告されている。民衆の聖なる物への欲求を学習動機へ結びつけた例として注目される。

以上のような祈禱文の暗記は，具体的な子どもの教育方針となって現れてくる。例えばキリシタン武将であった河内の三箇頼照はその子に以下のような規則を与えていた。

我ら（フロイス‥木村）の乗った船で彼（三箇‥木村）は文箱を開け，他のことは構わず数箇条をしたためると，直ちに息子を呼び，彼に与えるこれらの規則を順守して怠らぬよう注意すべきこと，ならびに，もしこれを違えたら厳罰に処することを伝えた。その規則というのは，日々の時間を区分すること，すなわち，聖母のロザリオを三つに分けて，朝，正午，夜に祭壇の前に跪いて読誦し，その後は所持しているコンタツを用いていくつかの祈禱を行ない，一定の時間を書くことに，また他の一定時間を勉学することに（充てる）というものであり，息子の侍従の一人には，もし彼がこれを怠る時は，叱責するため報告するように命じてあった[24]。（1567.7.8）

この三箇頼照の教訓によれば，一日３回の読誦を行ない，その後コンタツを用いながら祈禱を行なうように求めているが，この祈禱はおそらく暗誦であったろう。さらに一定時間の勉学を求めていることは，上流階級のキリスト教教育の具体相を示している事例として貴重である。

イ，楽器・合唱の活用

日本に於ける西洋音楽の嚆矢をイエズス会による教会音楽の導入に求める見解は，良く知られている[25]。ロペス・ガイも「教会音楽が初期イエズス会士のもっとも独自の活動の中でも重要な地位を占めていることを忘れてはならない」と指摘している。そのことは，1554年の第三次宣教師派遣団（ルイス・フロイスを含む）の選抜の基準が典礼的・音楽的才能であったことからも知れる[26]。

こうした音楽を重視したイエズス会は，当然のことながら彼らが設立した学校教育においても音楽教育に力を注いでいるが[27]，本稿は学校教育を直接対象としていないのでここでは言及しない。

さて，まず西洋楽器の導入とそれがもたらした宗教的情操形成における影響についてみてみよう。

【西洋楽器の導入】

≪ヴィオラ≫

ヴィオラについては，以下の記述が最初である。

（豊後の）国主はそれから七日後に晩餐のため修道院に来ることになっていた。‥食卓につくと，彼らと我らの双方の流儀の馳走が出され，食事の間，ヴィオラの演奏を聴いた。これはキリスト教国の王侯の前でも演奏しうるほどのもので，演奏者の子供たちはキリシタンであり，皆白衣をまとっていた。彼（国主）らはこれを聴いて非常に喜び，とりわけ世子は食卓についていたが，すべて（の動作を）を止め（て聞き入り），彼もまた少年なるが故に，子供たちのところに行った[28]。（1562.10.25）

≪オルガン≫（初出は，1557.10.29の後出史料）

ヴィオラと並んで頻出する楽器がオルガンである。これについては，以下のような記述がなされている。

同地（高槻‥木村）はほとんどすべての人がキリシタンであり，受難の儀式はオルガンの歌（cãto de orgão）によって声も高らかに行なわれた。‥巡察師は助祭，副助祭及び侍者二人と共にミサを捧げた。都へ持参するオルガンを奏でたところ，キリシタンたちはかつてこのような物を目にしたことがなかったので驚嘆した[29]。（1581.10.8）

（河内･三箇では‥木村）聖土曜日には，儀式が始まる時及び次のミサの始めにオルガンを奏でた。（参列者）一同にとって極めて珍しいことであり，それゆえに彼らが示した満足，動揺，驚嘆を尊師は想像されるであろう[30]。（1581.4.14）

これらの記述からも，キリスト教布教において，楽器を用いた音楽による効果が目覚ましいものであったことが知られる。それは，目にしたことのない音響であったことはもちろん，日本の伝統的な音階などとは異なった全く違った音楽世界を日本人に知らしめ，その驚きがキリスト教への関心と受容に結び付いたものである。

【合唱の導入】

歴史的に見れば，楽器が日本にもたらされる以前においては合唱が教会音楽の最初であったと考えられる。

イエズス会の史料で確認される合唱の最初は,1552年の降誕祭（クリスマス）の際の合唱である。この日「我らはミサを歌い，よい声ではなかったが，これを聴いてキリシタンたちは皆，深く慰められた[31]」という。

また，豊後における聖週間の儀式でのオルガンと合唱の効果について，次のような報告がなされた。

> 我らは戸を閉じて韻文を歌って唱え，司祭が戸を開けよと言うと，我らはいとも敬虔に内からオルガンの歌で答え，三度（これを）終えたところで戸を開き，これにより諸人に深い喜悦をもたらした。我らは行列をなして祭壇へ進み，ミサを始めて受難の時刻に到ると，声高に歌ったが，受難（の歌）を始めてから終わるまで一同の感動があまりに大きかったので，ミサを唱える者も，キリシタンらもさめざめと泣き,聖霊のなせる業と思われた。(中略)我らは諸儀式を歌って行ない,これを哀悼の水曜日に始め,二つの合唱隊のために,同地で越冬したポルトガル人数名が助力した。‥オルガンの歌でベネディクトゥスを一度歌って詞編を終えた後，ミゼレレ・メイ・デウスを唱えたが，その時教会にいた多数のキリシタンは大いに涙を流し，信心を深めた[32]。(1557.10.29)

ここでは，音楽，特に合唱が多くの信者を感動のあまり落涙させたことが記されており，信仰の深化に効果があったことがわかる。

また，長崎・口之津においても以下のような合唱の実践がなされた。

> ドチリナが終わると，私は子供たちに，ポルトガル人のため聖書の歌を幾つか歌うことを命じ，およそ七,八名の子供が，彼らの年齢の児童にはこれ以上為し得るほどの情感を込めて，アダムと罪から生じる諸悪の話を歌い始めた。同様に，少女らは受難の玄義を甚だ厳かに歌った。これらの歌は彼らが絶えず歌っている彼らの歌を忘れ（させ）るために作られたものであり，したがって，今やこの地においては，教会で教える歌以外には聞かれない[33]。(1563.11.17)

> 男児の合唱隊と女児の合唱隊が聴く者を驚嘆させるほどの深い信心をもって晩禱を聖歌により高らかに歌うのを見るのは，我らの主を大いに賛美するにふさわしいことである。私には彼らが私より二倍も多く詩篇を知っているように思われ，また，発音と歌い方がはなはだ巧みなので，これを聞いた人は彼らのことを修道者にして良く文法を学び，かなり歌に精通した青年に違いないと考えるほどである。‥彼らはこれまで私が目にした中で，もっともよく教理を授かった子供たちであり，ほとんど日に三度，すなわち，ミサと晩禱とドチリナのため教会を訪れ，夜には連禱に訪れる。また，司祭は彼らに（日本の）文字の書き方を学ばせており，そのために優れた祐筆なる師が一人いる[34]。(1566.10.20)

聖歌などの歌唱学習によって，ラテン語などの発音と文法に長けるのみならず，キリスト教信仰を身体化する効果があったのではないかと思われる。

イエズス会士にとっては,音楽がキリスト教と密接に結び付いた重要な存在であったが,日本の民衆にとっても邦楽は非常に浸透した文化であった。そのために文化摩擦というべきものも起こり，日本の「音楽は自然のものも作ったものも，（音の）上がり下がりを（示す）符号を用いているとは言え，はなはだ不調和で聴くに堪えないので，これを十五分間耳にすることは相当な苦痛である。しかし，日本人を喜ばせるため我ら（の会員）は数時間聴くことを余儀なくされる。彼らはその音楽をたいそう好み，世にこれに並ぶものはないと考えているほどである。我らの音楽はたとえオルガンの歌であってもひどく彼らに嫌われる。祭りにおいては種々の立派な演劇や笑劇を行なうが，かならず音楽が前奏される。[35]」(1584.1.6) という報告がなされている。確かにオルガンなどの西洋楽器に魅了された日本人も多かったろうが，一方では聞きなれた邦楽世界とは全く異質な音楽になじめず，場合によっては拒否する例もあった[36]。

日本とヨーロッパの文化接触が音楽の世界で起こっていた一方，イエズス会内部においてはオルガン伴奏歌唱の廃止などが議論されており，1575年チョランで開催された管区協議会においても協議されている。この時日本での布教経験があるガーゴが,「歌唱は布教地で保持されるべきである」との主張をしているが,その論拠として「歌唱によって異教徒が深く感動しキリスト教徒が教化された」ことをあげている[37]。このように司牧的動機からの音楽，とりわけ歌唱のもつ効果が布教現場では実感されていたのである。

第３節　演劇及び儀式・典礼の活用

音楽の導入と共に，演劇という手法もイエズス会の布教戦略として重要である[38]。演劇においても，音楽

同様にそれまで伝統的な演劇が存在しており，民衆から受容・支持されていた。ルイス・フロイスは，日本の演劇について「われわれの劇は談話によって演ぜられる。彼らのはほとんど常に歌い，または踊る[39]」と述べている。この場合，フロイスが論じている演劇とは，おそらく能であろうと推測される。

日本における演劇の上演については，以下のような記述がある。

＜豊後の事例＞過ぐる降誕祭のおよそ二十日前，司祭は二,三名のキリシタンに対して，降誕祭の夜，諸人が主（なるデウス）において楽しめる何らかの演劇を行うように言い，何をなすべきか決めていなかったが，司祭はそれを彼らに一任した。彼らは降誕祭の夜になると，聖書により知った事柄に関する数多くの劇を披露したが，これはデウスを賛美すべきことであった[40]。(1561.10.8)

＜大村の事例＞ドン・バルトロメウ（大村純忠‥木村）は我らの主なるイエズス・キリストの降誕を祝って，ヨセフの生涯やその他の事柄を日本風の劇により披露することに決め，降誕祭の夜，司牧者が厩に来たこと，ならびに他の笑劇を上演して夜半にまで及んだ。‥（翌々日の日曜日に‥木村）教会に隣接する土地に大きな舞台を設けたが，これは見物を望む人たちが見られるようにするためで，その土地の周囲に多数の桟敷が設置されており，ここには大勢の異教徒やキリシタンの夫人，その他の婦女子がいた。この祝祭に二千人以上が集まり‥これらのキリシタンや異教徒は皆，踊り歌い，彼らの楽器を奏した。というのも，誰もが彼らの流儀でそうすることを心得ているからである。ドン・バルトロメウは異教徒が我らの主（なるデウス）を崇め，その降誕を祝うことを広めるための導管であるが故に，彼もまた大いに喜んで同じことをすべて行なった[41]。(1569.8.15)

具体的な演目は，「エジプト脱出」「鯨の中から現れた予言者ヨナ」(1562.10.11)，「アダムとエヴァ」「ノアの箱舟」(1566.9.16)，「アダムの堕落」「アブラハムの犠牲」「ロトの話」「ノアの箱舟」「ヨセフとその兄弟」「父ヤコブからエジプト入りまで」(1567.9.27) など，旧約聖書に基づくものが多い。大村で演じられた「笑劇」はおそらく狂言ではないかと思われるが，このようにイエズス会劇と日本の伝統的な演劇を併演させていた。

その教育的効果については，豊後での降誕祭にからんで次のように述べる。

日本人はこれらの劇では重立った話を人物によって表すのが常で，さらに適当なところは人物自身が彼らの言葉で説く。年代記の編者や福音書の著者に関わるところは，そのために編成された他の人たちが合唱し，事柄の説明やキリシタンの感化に必要な教理を挿入する。以上のことは我らの聖教の驚嘆すべき玄義であり，また当地のキリシタン宗団においては甚だ新奇にして，彼ら自身の方法による演出にも適しているが故に，この祝祭にはキリシタンのみならず，彼らの異教徒の親戚多数が参集した[42]。(1567.9.27)

こうした降誕祭での演劇などでは，キリシタンや異教徒（仏教徒）もいっしょに踊り歌ったりした。こうした演劇に伴う歌や踊りについて，降誕祭を主催した大村純忠は異教徒が我らの主（なるデウス）を崇め，その降誕を祝うことを広めるための「導管」として考えていたのである。

祈禱や音楽，あるいは演劇などは，基本的に祝祭日の儀式・典礼において演じられることが多い。そうした儀式・典礼そのものが，宗教的情操や信仰を形成することにおいて大きな役割を演じている。それは，カトリックの基本的な性格からも導き出されるものであろう。

例えば，長崎・生月での降誕祭の様子を見てみよう。

彼らは教会でロザリオを用いて祈りを捧げ，同夜上演されたミステリオ劇（misterio）について考えながら終夜過ごした。また，我らはこの平戸においても地元のキリシタンや近隣のキリシタンの深い喜悦とともに祝祭を行ない，彼らは（教会に）集まって祈りを捧げたり，牧者の拝礼のようなミステリオ劇，その他聖書に関する劇を上演することによりその夜を過ごし，司祭らはその間に，諸王国の首都であるローマから司祭らが訪れ，創造主を忘れてはなはだしい無知蒙昧に陥っている彼ら（日本人）に真理を説く様を（上演）したところ，彼らは皆大いに心の慰めを得るとともに盛んに涙を流した。また，デウスを讃える歌を彼らの言語で歌って過ごした。然して彼らには，内面的にも外面的にも深い信心と満足が認められ，さらに衣服においても喜びが表れていた[43]。(1565.9.23)

演劇，歌などの様々な効果の中で行われた降誕祭に臨席した信者は，「盛んに涙を流し」，そして「内面的にも外面的にも深い信心と満足」を得たのである。

こうした背景には，儀式を好む日本人の性向がある。イエズス会士はこのことについて，1582年報において「日本人は儀式を荘厳かつ豪華に行なうことを好む[44]」と述べ，また「日本の儀式は数え切れず，これをことごとく知る人はなく，儀式のことのみを記した書物が多数ある。また，少しの水を飲むにも七乃至八つの儀式があり，扇を用いるには三十以上，食事や進物，人との交際については無数にあり，このことと文字のほかに学ぶものはないと言ってもよい。[45]」（1584.1.6）とも述べているほどである。

音楽や教会内部の装飾によって荘厳な宗教的雰囲気を醸し出し，その中において執り行なわれる儀式や典礼が，信者の宗教的情操を高める効果をもたらしたことは想像に難くない。

おわりに

フランシスコ・カブラル師は，インド管区長宛ての書簡で，日本人をキリスト教へと導く力について，興味深い報告をしている。それは，山口に住むマテオというキリシタンが多くの人にキリストの教えを説いているのであるが，「このマテオという人は村々で針や櫛を売り歩きながら，デウスの戒律を説いて回っていたが，読み書きが出来ず，祈りの言葉さえ正しく唱えられなかった。[46]」（1574.5.31）というのである。

こうした日本人信者は，当然のことながら十分な教義を学んでいるわけではない。しかし，彼らはイエズス会宣教師が以下のように伝えるような布教力を持っていた。

> 今日キリシタンになった者が，明日は他人を改宗させるのを見ると，私は実際に非常に慰められた思いでいられるが，他方ではまた当惑もしている。私は，我らが主デウスの教えがこのような貧しいながら謙虚で純朴な人々に伝わり，その人たちが，異教徒であることと偶像崇拝をやめてすぐに，聖なる洗礼で授かった恩寵をもって，デウスの偉大さを説いて回る者になり，それぞれのやり方で私たちの同僚の不足を補ってくれるのを見ると慰められる。他方，‥純朴な人々のうちの誰か他の者が，使う言葉は拙く，話はもっと拙いのに，異教徒のかたくなな心を動かすのを目にすると，私は当惑させられてしまう。私が，熱い，十分に練り上げられた論拠をもってしても，デウスの戒律が善いものであることということを彼らに認めさせることがやっとということもしばしばで，そのような時，彼らはそれまでと変わらず旨目（盲目か‥木村）で不信心なまま，説教の場から立ち去っていくからである[47]。（1574.5.31）

すなわち，ヨーロッパでキリスト教神学を極め，また布教についても十分な訓練を受けてきた宣教師よりも，信仰的には不十分な知識しか持ち得ていない「純朴な人々」が民衆の心の中にキリスト教信仰を浸透させうる強力な力を持っていたのである。

さて，これまで，16世紀のイエズス会の布教活動を，非文字メディアの活用例を中心に考察してきた。これらから見えてくるのは，宗教的情操や道徳といった感情に基盤を持つ価値は，論理以前の身体的感性に大きく依存しているということである。キリスト教を受容した多くの民衆にとっては，文字メディアによる信仰世界への誘いはほとんど機能することなかったであろう。彼らの多くは，宣教師がもたらす聖なる「モノ」を伝統的な仏教や神道の聖なる「モノ」の代替として受け入れ，なおかつ声明や念仏，祝詞の代わりとしての祈禱文を暗誦し，音楽などの荘厳な舞台装置を備えた教会という空間によって，その信仰を受け入れ深めていったのではなかったか。

これは，教育の世界においても同じことが言えよう。学校における儀式的行事では「厳粛で清新な気分を味」わうように求められているが，こうした「厳粛さ」がもたらす教育効果に着目してのことであろう。それは16世紀の日本人が，キリスト教会で体験したものと大差はないのかもしれない。

以上，考察した非文字メディアによる布教活動は，別の視点から言えば「身体性」への働きかけでもある。目で見，耳で聞き，体全体でキリスト教を感じ，かつ内面化するものであった。こうした視点は，これからの教育概念を押し広げる可能性を含むものであろう。

最後に，これからの課題について述べておきたい。

一つは，史料についてである。語学力の関係から原典にあたることができず，翻訳に頼らざるを得ないことである。イエズス会の史料の原点は，ラテン語，ポルトガル語など多岐にわたり，語学力に限界がある現状では，翻訳に頼らざるを得ない。こうした限界が，研究にどのような影響をもたらすのか，十分に検討しなければならない。また，主に使用したイエズス会の報告に関しては，それがイエズス会本部への報告であ

ること，公開を前提として書かれたことなど，史料に一定の傾向があることは否めない。とりわけ布教実績をあげるために，信者数や活動歴などに誇張がなかったとは言えないであろう。音楽に関して触れたところでもわかるように，西洋音楽に涙した日本人と嫌悪した日本人がいたことからも明らかである。史料に書かれている日本人の信仰がすべて事実とは思えないものも多く，扱いには慎重を期さなければならない。

もう一つは，儀式などにおける絵画の活用など，本論で取り上げなかった側面からの考察である。儀式においては，多くの宗教画が掲示され，信者に多くのことを教えて行ったことが予想される。文字の読み書きに限界がある民衆にとって，教会に掲げられた宗教画がもたらす効果は大きかったに違いない。史料の関係から，詳しく触れることができなかったが，今後の課題としておきたい。

[1] 大戸弘安･八鍬友広編著『識字と学びの社会史－日本におけるリテラシーの諸相－』（思文閣出版, 2014年）。
[2] 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋舎出版，第Ⅰ期全５巻，1987 ～ 88，第Ⅱ期全３巻，1990 ～ 1997，第Ⅲ期全７巻1991 ～ 1998）。なお同報告集からの引用については，以下「報告集」と略し，期及び巻の番号を，例えば第Ⅰ期第1巻の場合，Ⅰ－１とする。他に基礎資料として，ルイス・フロイス（松田毅一・川崎桃太訳）『完訳フロイス　日本史』（全12巻）（中公文庫版，2000），村上直次郎訳『イエズス会日本年報　上下』（雄松堂，1969初版），同訳『イエズス会士日本通信　上下』（雄松堂，1968）などを使用。
[3]『報告集　Ⅲ－１』228頁。
[4] 同上184頁。
[5]『報告集　Ⅲ－３』257頁。
[6] 具体的な説教の方法については，例えば「まず初めに，日本人の諸宗旨の欺瞞と悪魔の虚偽をことごとく彼らに示す。彼らが己れの誤りを十分に認識した後，デウスが存在することなどを証明する。これら自然の事柄について教えた後，デウスの御子の託身とこれが必要である理由，その他我が聖教の秘儀や聖三位一体を説き，これを信じたならば洗礼を授けるのである。また，彼らを持続させることにはなはだ努め，日曜日毎に日本語で説教をなし，ミサを執り行なう。」（『報告集　Ⅲ－１』228-229頁）などの記述が散見されるが，イエズス会の日本における説教については，史料の関係から今後の課題とせざるをえない。

また，豊後において国主（大友宗麟）に対して「我が霊魂と肉体，および天と地の創造主にして，人間の救主なるデウスの教えを簡略に説いたが，この創造主を崇めて従う者は皆，悪魔の欺瞞から解き放されるのであり，主（なるデウス）を崇めぬ者は現世において悪魔の虜となり，地獄に落ちることを免れないであろう」（『報告書　Ⅲ－１』108頁）と説いているが，キリスト教の天地創造説などの世界観･宇宙観はともかく，天国・地獄の二分論的な論旨は日本の伝統的な仏教にもあり，日本人には受け入れやすかったと思われる。
[7]『報告集　Ⅲ－６』4-5頁。
[8] 聖遺物に対する崇敬については，秋山聰『聖遺物崇敬の心性史－西洋中世の聖性と造形－』（講談社，2009）が参考になる。
[9]『報告集　Ⅲ－１』345頁。
[10]『報告集　Ⅲ－２』206頁。
[11]『報告集　Ⅲ－４』46頁。
[12] 同上48頁。
[13] 後年，弾圧によって火刑に処せられた殉教者の遺体や刑柱を集めようと信者が殺到した例もある（フロイスによる26殉教者に関する報告（Ⅰ－３，80－81頁）を参照，山本博文『殉教－日本人は何を信仰したか－』光文社新書，2009，193頁）。
[14]『報告集　Ⅲ－３』137頁。
[15] 宮崎賢太郎「日本人のキリスト教受容とその理解」（山折哲雄ほか編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』（日文研叢書，国際日本文化研究センター，1998），187頁。
[16]『報告集　Ⅲ－１』350頁。

[17] 同上。
[18]『報告集　Ⅲ－１』372-373頁。
[19]『報告集　Ⅲ－２』245頁。
[20]『報告集　Ⅲ－３』151-152頁。
[21]『報告集　Ⅲ－１』376-377頁。
[22]『報告集　Ⅲ－３』46頁。
[23] 同上50-51頁。
[24] 同上204頁。
[25] 例えば，Jesús López Gay,S.J.「キリシタン音楽－日本洋楽史序説－」（『キリシタン研究』第16輯，1976），竹井成美・溝部脩「中世・近世におけるわが国の音楽教育とその教育的意義づけ（Ⅰ）－室町・安土・桃山時代（1550年から1580年）の豊後キリシタンにおける音楽教育とその音楽史的考察－」（大分県立芸術短期大学『研究紀要』20，1982），海老澤有道『洋楽伝来史－キリシタン時代から幕末まで』（日本基督教団出版局，1983），横田庄一郎『キリシタンと西洋音楽』（朔北社，2000），皆川達夫「キリシタンの音楽」（『国文学　解釈と教材の研究』47（８），2002），小泉優莉菜「かくれキリシタンと音楽－日本への西洋音楽の伝播と祈りの音楽の変容－」（『比較民俗研究』28，2013）など。
[26] 前出Jesus Lopez Gay,SJ論文４～５頁。
[27] 1581年報によれば，神学校では，「彼らは（一日の）時間を割って昼の一部を日本（語）の読み書き[これに多くの時間を費やす]に当て，他の一部をラテン語の読み書き，および能力したがってラテン文法を学ぶことに当てている。‥また彼らはオルガンで歌い，クラボを弾くことを学び，すでに相当なる合唱隊があって，彼らの多くは容易に盛式（荘厳）ミサを歌ってい」た（『報告集　Ⅲ－６　11頁）。
[28]『報告集　Ⅲ－２』62頁。
[29]『報告集　Ⅲ－５』338頁。
[30] 同上290頁。
[31]『報告集　Ⅲ－１』110頁。
[32] 同上257頁。
[33]『報告集　Ⅲ－２』129頁。
[34]『報告集　Ⅲ－３』117-118頁。
[35]『報告集　Ⅲ－６』286頁。
[36] ルイス･フロイスは,「われわれはクラヴォ，ヴィオラ，フルート，オルガン，ドセイン〔葦笛〕等のメロディによって愉快になる。日本人にとっては，われわれのすべての楽器は，不愉快と嫌悪を生じる」と述べている（ルイス・フロイス（岡田章雄訳）『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波文庫，1991）173頁）。
[37] 前出Jesús López Gay,S,J.論文10頁。
[38] イエズス会による日本における演劇については，安藤宜裕「キリシタン時代におけるヨーロッパ中世演劇の受容」（恵泉女学園短期大学『研究紀要』25，1992，小島幸枝「キリシタンと楽劇」（『国文学　解釈と教材の研究』45（２），2000）がある。また，服部幸雄「歌舞伎成立とキリシタンの時代」（『国文学　解釈と教材の研究』同前）などがある。また，日本を題材して創作されたイエズス会劇については，古瀬徳雄「ジャポニスムの諸相－日本を題材にしたイエズス会劇を中心に－」（関西福祉大学『紀要』２，2000）などが参考になる。また前掲のイエズス会の日本における音楽活動に関する論文にも，演劇に関する多くの言及がなされている。
[39] ルイス・フロイス前掲書，170頁。
[40]『報告集　Ⅲ－１』355頁。
[41]『報告集　Ⅲ－３』379頁
[42] 同上220頁。
[43] 同上48頁。
[44]『報告集　Ⅲ－６』110頁。
[45] 同上288頁。

[46]『報告集　Ⅲ－４』235頁。
[47] 同上239-240頁。